

---

# 耳の壁

杉田百

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

耳の壁

### 【Nコード】

N2804B

### 【作者名】

杉田百

### 【あらすじ】

耳掃除が大嫌いなモモエは、ある日耳が聞こえなくなってしまう・

感覚

じやりっという音がした。

モモエは耳掃除が大嫌いだ。

しかし、最近の異変に気づかない訳にはいかなかった。

左耳の様子がいい加減おかしい。

しゃべる度に、まるで耳に水が入ったかのように片方の耳だけがコーンと響く。

以前、モモエは耳掃除が趣味の友人に耳の穴の中を見せたことがある。

そこに居合わせた友人全員がモモエの耳の中を見て絶句し、一人はまるで鍾乳洞でも見た後のように

「この状態になるまでどのくらいの年月がかかったんだろうね・・・これはもう、耳糞というような言葉では語れない物質になっているよあ。」

と涙目で関心した程だ。

一同の驚愕する顔を見て何故かモモエは誇らしくなってきた。

耳掃除好きの由紀が

「チャレンジしたい」と言い出した。

モモエ意外の全員が息をのんだ。

「何に？」

モモエは笑いながら聞いた。

「その耳糞をきれいにとりたい。」

目をららんと輝かせ、少女のように由紀は訴えた。

これだから耳掃除好きな奴は・・・とモモエは思った。

そして不敵に笑ってその挑戦を受けて立つ事にした。

・数十分後、事件は起こった。

緊迫の耳掃除が始まってから30分もの時間が経過していた。

開始直後は「あちゃー」等と和やかな雰囲気だったが15分後にはみんなが静まりかえった。

ぼふっ

というマイクが服にこすり付けられたような音と共に、モモエの方耳が突然聞こえなくなった。

「あーあーあーあー」

自分の発するその声すら最早方耳には聞こえなくなっていた。

「耳が聞こえない・・・」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2804b/>

---

耳の壁

2011年1月15日21時19分発行